

大雪山国立公園の山岳トイレ管理レベルを考える

野川 裕史（上川自然保護官事務所）

大雪山国立公園は昭和9年12月4日に指定され今年で80周年を迎える歴史ある国立公園だ。面積は東京都の面積を超え、日本最大の国立公園である。総延長300kmにも渡る長大な登山道を有し、多くの登山者を受け入れている。

日本の国立公園は土地の所有にかかわらず公園区域を指定する地域性自然公園の仕組みをとっている。国立公園を指定する環境省は国立公園内のほとんどを所有していない。大雪山国立公園では国立公園面積226,764haに対し環境省所管地はわずか0.03%にしか過ぎない。国立公園の多くは林野庁の国有林、北海道の道有林である。また、国立公園を訪れる利用者に対しサービスを提供する施設（ロープウェイやホテル）もそのほとんどを企業等が許可を得て運営を行っている。環境省の国立公園レンジャーの仕事は、国立公園の管理・経営について土地所有者や事業実施者と協働で取り組むための調整を行う事である。

総延長300kmの長大な登山道を有する大雪山国立公園において、登山道及びその関連施設（避難小屋、野営指定地、そしてトイレ）は、国立公園を訪れる利用者（登山者）に対する主要なサービス提供施設である。これらの施設管理が適正に行われることにより登山機会が提供される。例えば、安全に、快適に、便利に登山する機会の提供や、挑戦したり鍛錬したりする登山機会の提供、静寂感や非日常性を提供する登山機会の提供がなされる。また、厳しい自然環境下においても自然を毀損することなく継続的に自然体験を享受する機会が得られるのである。

国立公園の管理に携わる自然保護官として第一義においているのは自然保護、環境保全であり、持続的に自然体験を享受できるよう登山道を管理することが、まず大前提と考えている。その上で、各々に異なる性格の登山道に対して、それに応じた管理を実施し、様々な利用者ニーズに対応した国立公園サービスを提供したいと考えている。

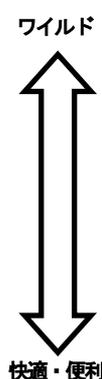
平成25年から環境省では多くの識者の方のご意見を伺いながら大雪山国立公園の登山道管理水準の見直しという作業に着手している。これは、平成14年～平成18年にかけて検討され、設定された登山道の区間毎に設定された管理レベルに対する再検討の作業である。約10年前に議論され設定された登山道レベルについては、一部その活用がすすんだものの、現在ではいくつかの課題が確認されている。

本来は、管理レベルを設定し、その登山道の性格（どのような登山機会を提供するルートなのか）を登山者に知らせることにより、登山者の判断の下、登山者が求める登山体験と管理者が提供する登山機会をマッチングさせ、無理な山行を防いだり、過剰な整備を回避したりすることが狙いだったが、これまで、なかなか狙い通りの活用まで進める事

ができていない。今回の再検討ではどのように活用するかを念頭に議論を進め、まとめていきたいと考えている。

さて、登山道の管理レベルのレベル設定と同様、山のトイレについても設置場所の条件、利用する登山者のレベルから相応の管理レベルが設定されてしかるべきと考えている。トイレがきれいで快適であることについては誰も異論は出ないだろうが、やはりその立地や処理方法、管理コストを勘案すると場所毎に設置できるトイレの形態は異なるだろうし、その形態を考えるにあたり、登山者のレベルとのマッチングも念頭に入れなければならないだろう。そこで、個人的見解から山のトイレレベルを試行的に整理してみた。

山のトイレレベル	トイレ形態	必要資源、コスト	導入例
レベル3	埋め戻し	スコップ、紙回収袋 利用者数・利用箇所の把握コスト	
レベル2	携帯トイレ	携帯トイレ、回収ボックス管理費 広報費、ブース管理費(設置の場合)	南沼野営指定地
レベル1'	山岳トイレ 浸透式トイレ	運搬費用(低) 清掃管理	白雲岳等避難小屋 ^(※)
レベル1	山岳トイレ 汲取式トイレ、 バイオトイレ	運搬費用(高)、清掃管理 電気(処理用)	黒岳石室
レベル0	水洗トイレ	水、電気、排水処理施設、清掃管理	ロープウェイ駅



※白雲岳・忠別岳・ヒサゴ沼といった避難小屋のトイレは汲取式ではあるが、移入量と分解量が拮抗し、実質浸透式のトイレであるように見受けられる。

表中網掛けされた、レベル3とレベル1'の埋め戻しや浸透式トイレについては、その処理を山中で行う方式で有り、有機物を自然界に供給することとなる。自然分解の能力を超えた場合には水質、植生等への影響が懸念される。

表中ゴシック体で記述されたレベル3とレベル2（ブース未設置の場合）は、隠れる場所を必要とする。特定の場所に集中した場合、登山道からそこに至る間にトイレ道を生じることが懸念される。休憩箇所、野営指定地など登山者が滞留する箇所を外して行うよう指導を加えなければならない。

登山者との関係で整理すると、レベル0の水洗トイレは街場のトイレと同じであり、都市公園的な利用地の散策者向けとなる。登山道のなかでも山麓部の散策路やバス観光などで訪れる方も共用するような園路的性格の箇所に立地する。逆に稜線部など国立公園核心地に水洗トイレを設置するというは過剰整備と言わざるを得なくなるだろう。

レベル2の携帯トイレの導入は健脚日帰りのルートか1泊程度のルートを楽しむ登山者層に提供するのが現実的である。登山者が自発的に自らの尿尿を運搬する事ができてこそ導入でき、登山者が自らを管理する意思や能力があるかが重要になる。尿尿処理に対して

サービスを受けるままの者でも利用できるレベル1の山岳トイレとの違いは、その意思、自発性にあるといえる。個人的な実感としては、ロープウェイが利用できる旭岳・黒岳や、標高1500m近くまで車道で上がれる銀泉台～赤岳というアクセス性の良い登山道においては登山に一定の快適性、便利さを求める登山者層の割合が多く、これらのルートに携帯トイレの利用を普及・定着させていくのは登山者と山のトイレレベルのミスマッチが生じ、現状では難しいのではないかと感じる。

なお、携帯トイレの普及に当たっては、利尻山や羅臼岳の例にあるように、仕組みのわかりやすさ、利用しやすさ、捨てやすさなど登山者が参加できる環境づくりに努力を払わなければ定着しない。利尻山や羅臼岳と大雪山系の違いは、その山系の規模や登山道の延長であり、どうしても縦走にて泊数を重ねると持って歩きづらく、登山口が数多くあるため一元的な広報や処理方法の統一が図りづらいなど課題がある。携帯トイレ普及のためには利尻山や羅臼岳以上の努力を地域を挙げておこなって行かねば実現しないだろう。

レベル3の屎尿処理としての埋め戻しは、国立公園の管理としては現状採用できない。バリエーションルート利用者の世界だろう。国立公園の管理としては、全体の利用者数や野営箇所の把握を行い、登山者の総量規制や事前レクチャー制度等を組み込んで、自然環境への影響を及ぼさない範囲にとどめる管理を行うなどとしなければ、導入はできないだろう。実際の登山道での現状はレベル1の箇所（一般的な登山道、野営指定地の周辺）でレベル3の屎尿処理がされており、これが自然の処理能力を超え問題となっている。ミスマッチを起こしているたれ流し行為は、登山者の自然への甘えと感じる。

山岳トイレに整理したのは、レベル1の汲取式トイレ・バイオトイレとその派生的(?)な浸透式トイレである。ほとんどの登山者が山のトイレとはこのようなものと納得して(させて)利用しているのではないだろうか?街のトイレと比べ快適とは言いがたいが、登山行動中での利便性は高い。

レベル0の山麓・街場の水洗トイレはほぼ公衆トイレであり、レベル2の携帯トイレはこのシステムの受益者である登山者が実働することにより運用されるトイレである。レベル1のトイレはこの中間に当たるという位置づけを明確にし、受益者からの負担も得て適切に運営していくことが望ましい。

毎年事例発表で紹介されているが、黒岳石室及び白雲岳避難小屋のトイレは「大雪山国立公園上川地区登山道維持管理連絡協議会」の枠組みで受益者負担を得ながら運営している施設である。レベル1の山岳トイレの管理運営における代表的な取組である。

管理費用・労力を行政が負担するとともに、直接的受益者である登山者は協力金を払い、間接的受益者である観光協会やロープウェイ事業者等も管理費用や労力の提供を行うことで管理運営がされている。管理に対して十分ではない部分もあるが、管理側と利用側の相互扶助・協働の仕組みができていることは、次の課題解決に向けての土台、基礎が用意されている状態であり、心強く感じている。関係者の方々に感謝するとともに、今後もよりよい国立公園サービスを提供できるよう調整に励んでいきたい。